

# 1

## 国語科

### 国語科における学習過程の例

国語科の単元における学習過程を大きく捉えると、学習課題をつかむ、学習課題を追究する、自分の学習に対する考察をする（振り返り）といった流れが考えられる。国語科における学習過程を以下に示す。

#### 【学習課題をつかむ】

- ・学習課題をつかみ、単元の見通しをもつ。

#### 【学習課題を追究する】

- ・「認識から思考へ」、「思考から表現へ」という過程の中で、理解するための力や表現するための力を使いながら、学習課題を解決する。

##### A 話すこと・聞くこと

- 話題の設定、情報の収集、内容の検討
- 構成の検討、考えの形成、表現、共有（話すこと）
- 構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有（聞くこと）
- 話合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）

##### B 書くこと

- 題材の設定、情報の収集、内容の検討
- 構成の検討
- 考えの形成、記述
- 推敲
- 共有

##### C 読むこと

- 構造と内容の把握
- 精査・解釈
- 考えの形成
- 共有

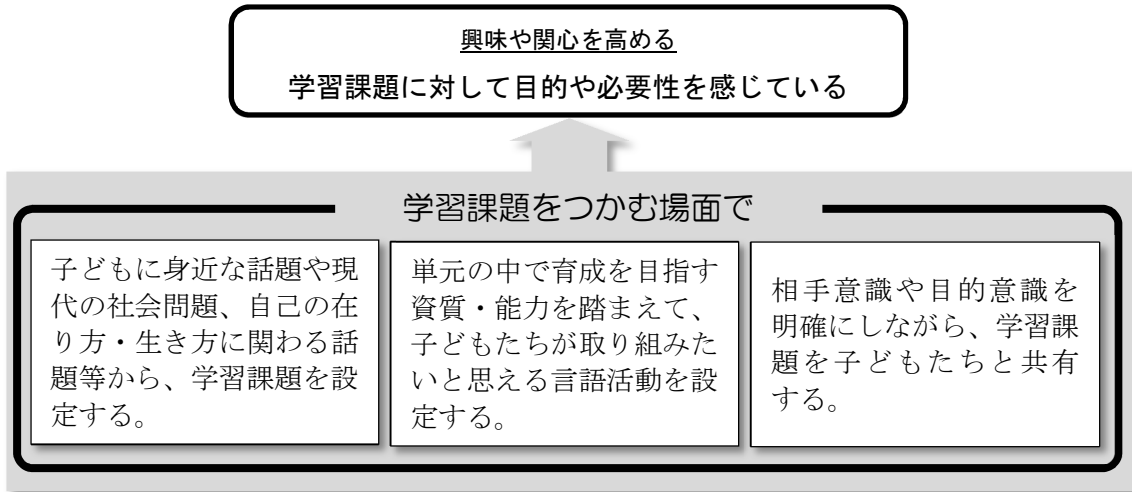
#### 【自分の学習に対する考察をする（振り返り）】

- ・自分の学びを振り返る。
- ・次の学習活動にどう生かせるか考える。

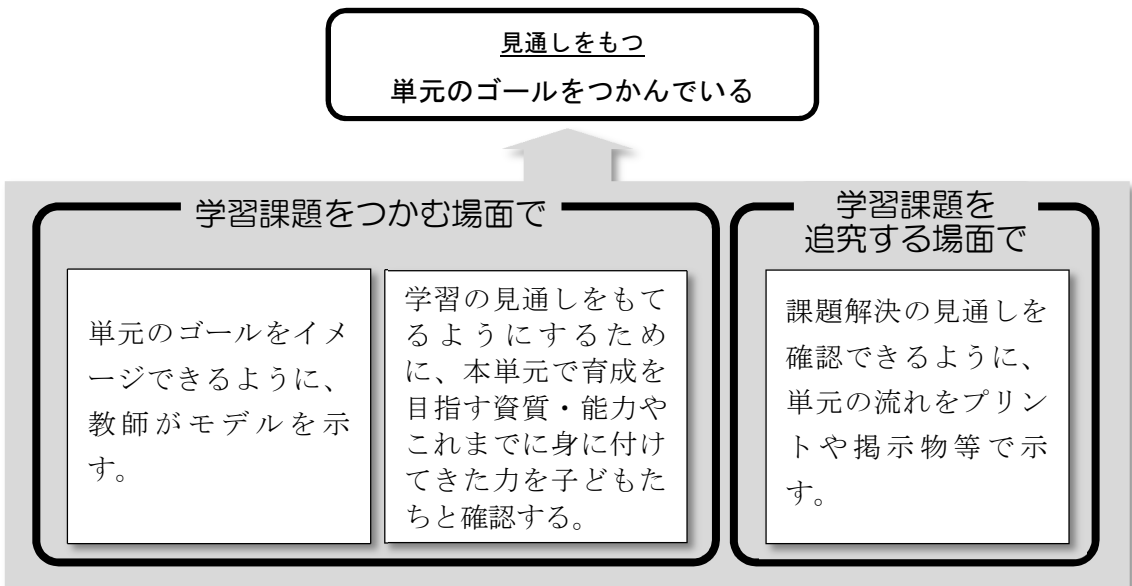
なお、一連の学習過程は、必ずしも一方向の流れではなく、指導のねらいに応じて、戻ったり繰り返したりする場合があることに留意する必要がある。以下、この学習過程に沿って、それぞれの学びの姿を実現するための教師の手立てを例示する。

## 「主体的な学び」を実現するために

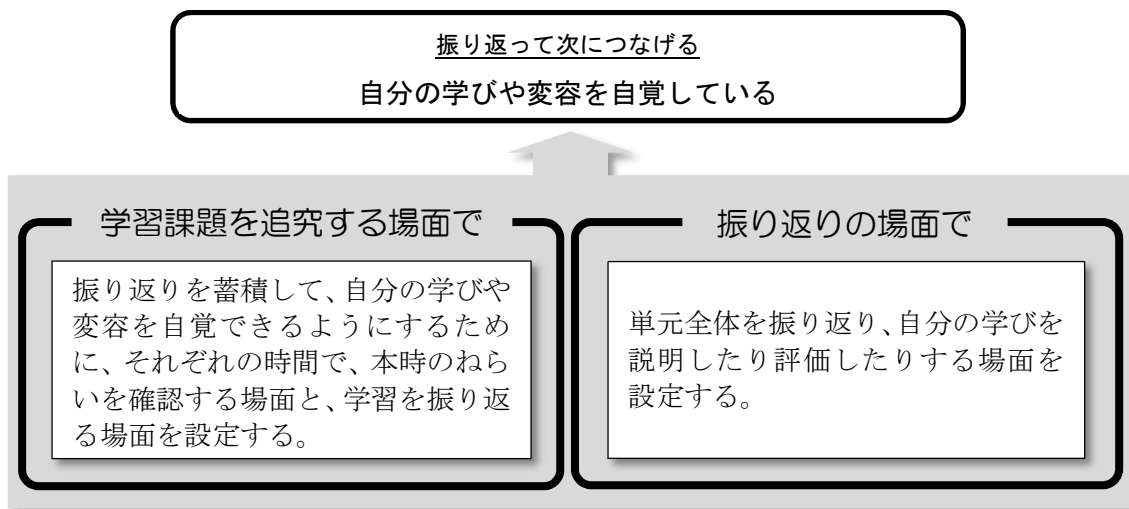
国語科において、「主体的な学び」を実現するためには、例えば次のような子どもの姿が見られるように、教師が手立てを講じることが必要である。



- ◆ 学習課題をつかむ場面では、子ども自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるように学習課題を設定すること、学ぶ意欲を高められるような子どもたちへの働きかけを工夫することが大切である。
- ◆ 高等学校段階の「書くこと」の単元では、「相手や目的に応じて題材を選び、効果的な表現を考えて学校祭の招待状を書く」といった学習課題が考えられる。



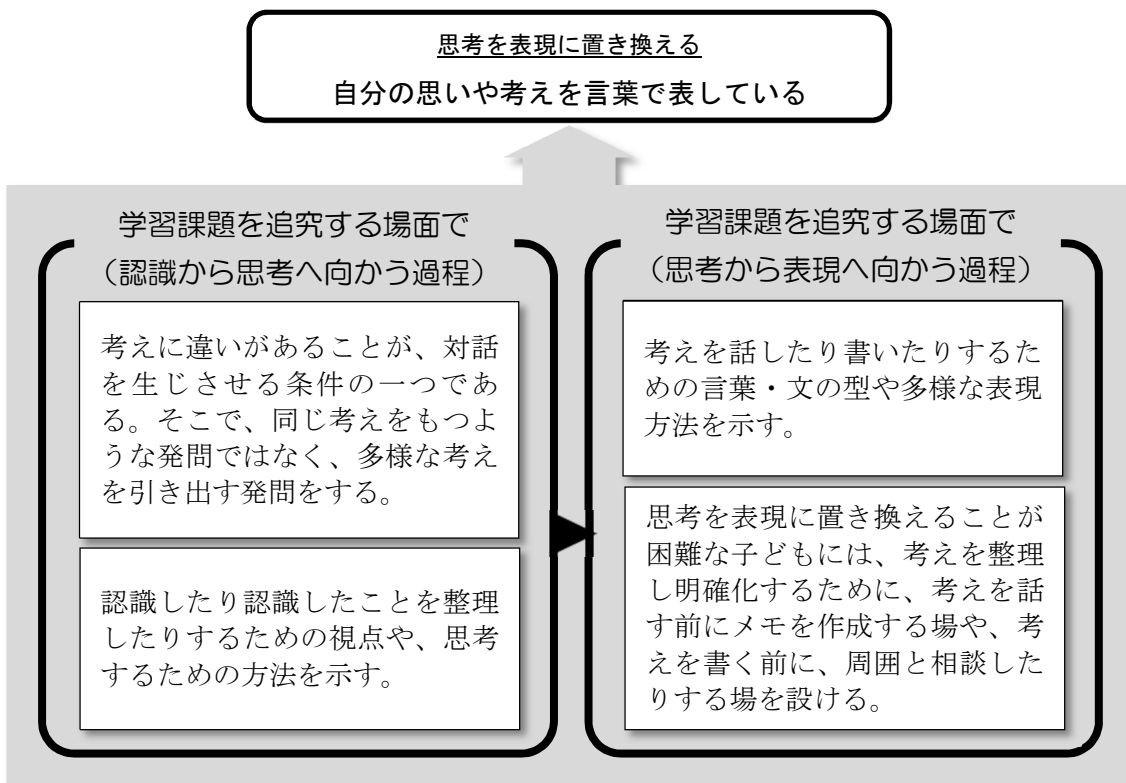
- ◆ 単元の終末に、子ども自身が自分の学びを自覚したり自分の学びの変容に気付いたりすることができるようにするためにも、単元の導入時に、単元のゴールや本単元で育成を目指す資質・能力を子どもたちに示すことが大切である。
- ◆ 単元の導入時だけではなく、単元を通して子どもたちが常に見通しを意識できるようにすることが、子どもの「主体的な学び」に結び付いていく。



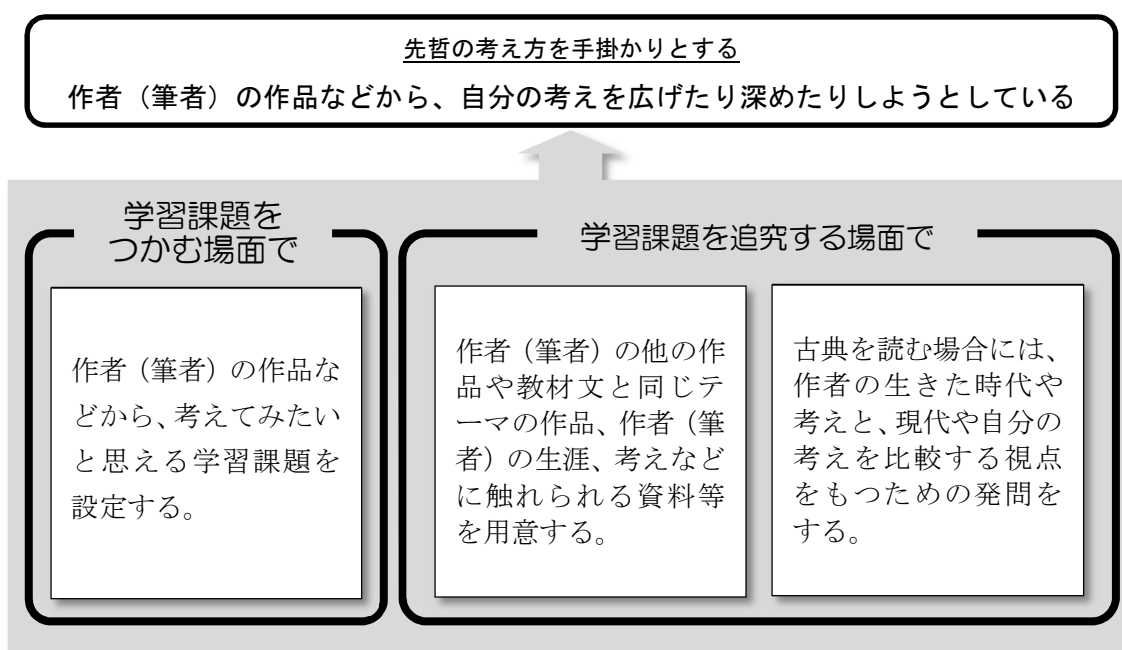
◆ 子どもたちが自分の学びや変容をメタ認知できるようにするために、自分の学びを説明したり評価したりする場面を設けることが必要である。

「対話的な学び」を実現するために

「対話的な学び」を実現するためには、まず、一人一人が自分の考えをもつことが大切である。国語科においては、例えば次のような子どもの姿が見られるように、教師が手立てを講じる必要がある。

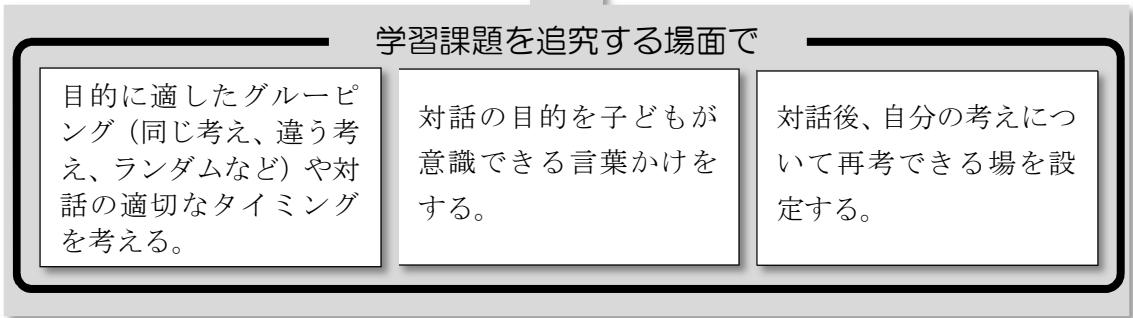


- ◆ 認識から思考へ向かう過程で
  - ・自分の考えをもつために、手掛かりとなる視点を示すことが有効である。例えば「読むこと」の単元では、「分かったこと」「感じたこと」「もっと知りたいこと」「疑問があること」といった視点を示すことが考えられる。
  - ・自分の考えをもつために、例えば「比較する」「選択する」「言葉を手掛かりにして考える」といった、思考するための方法を示したり、これまで身に付けてきた方法の中から自分で選択できるような問いかけをしたりすることが大切である。また、「これはどういう意味だろう。」「どうして作者（筆者）はそう思うのか。」「本当にそうだろうか。」「もし、～だとしたらどうなのだろう。」「といった、「内容の検討」や「構造と内容の把握」をしていく際の問いかけの言葉を子どもに投げかけることも、自分の考えをもつための有効な手立てとなる。
- ◆ 思考から表現へ向かう過程で
  - ・思考を表現に置き換えるためには、語彙の量の多さや質の高さが必要である。そのためにも、日常的に語彙指導を充実させることが重要である。



- ◆ 「読むこと」の単元では、対話する相手として、先哲である作者（筆者）と向き合うことも考えられる。そのためには、先哲の作品などを手掛かりとして、子どもたちが考えてみたいと思える学習課題を設定することが大切である。また、学習課題を追究する場面では、資料等を十分に準備することが先哲との対話の手掛かりとなる。
- ◆ 古典を読む際には、自分の考えと比較するための視点を子どもたちが見いだすことができる発問をすることが大切である。例えば、「現代の社会や自分と同じこと・違うことは何か。」「文章に書かれていることを現代の社会や自分に置き換えてみたらどうだろうか。」といった発問が考えられる。

互いの考えを比較する  
他者の考えを基に、自分の考えを明確にしたり修正したりしている

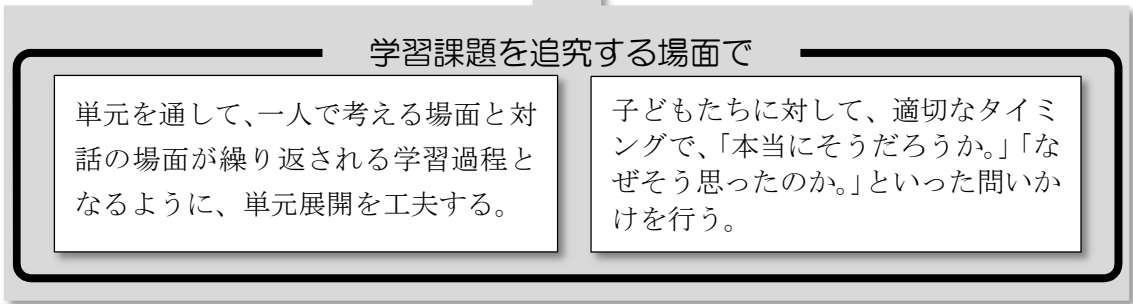


◆ 対話の目的として、比較するだけではなく、確認、助言、方法の共有、思いの分かち合いや考え方の認め合いといったことが考えられる。何の目的のために対話を行うのか、子どもたちが目的意識をもって対話を行えるようにすることが大切である。目的意識をもった対話は、対話後の再考の場で、自分の考えをより明確にしたり修正したりすることにも、有効に働く。

**「深い学び」を実現するために**

国語科において、「深い学び」を実現するためには、例えば次のような子どもの姿が見られるように、教師が手立てを講じる必要がある。

思考して問い続ける  
自分の考えをより深いものにしようとしている



◆ 子どもたちが自分の考えをよりよいものに近づけていくためには、課題に対して、自分の考えをもつ→対話する→再考する→対話する→再考するというように、一人で考える場面と対話の場面が繰り返される学習過程となるよう、単元展開を工夫することが考えられる。

◆ 子どもたちが問い続けるためには、これまでの学習において読み取ったことや考えたことをすぐに確認したり、考えの手掛かりを選択したりできるように、ノートやファイル、掲示物等で蓄積することも大切である。

知識・技能を活用する  
既習事項と関連付けて考えている

単元全体を通して

本単元と関連が深い既習事項については、単元や授業の導入時に確認する。

子どもが既習事項を活用できるように、適切な場面やタイミングで助言を行う。

- ◆ 「国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、資質・能力の定着を図ることを基本としている。」（中学校学習指導要領解説国語編 平成 29 年 6 月）このことを踏まえ、課題解決に生かせる既習事項を想起し、それと結び付けて考える場面を意図的に設けることが大切である。
- ◆ 考える際に既習事項を活用していくことは、考える手掛かりになるとともに、既習事項の確実な定着、更には知識を体系化していくことにもつながっていく。そのためにも、適切な場面やタイミングで確認や助言をすることが大切である。

自分の考えを形成する

これまでの学習を手掛かりにして、自分の考えを作り上げている

学習課題を追究する場面で

本単元で理解したこと、考えたこと、表現したことなどをノートやワークシート等に累積し、それらと既存の知識や様々な体験などを手掛かりにし、思いや考えを広げたり深めたりできる学習活動を設定する。

学習のまとめとして、設定された言語活動において、最終的な自分の考えが表現できる学習活動を設定する。

- ◆ 国語科においては、「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設定することなどが、「深い学び」の実現に結び付いていくと考えられる。
- ◆ 「言葉による見方・考え方」とは、子どもたちが「学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」である。
- ◆ 「読むこと」の単元において自分の考えを形成するためには、子ども自身が本単元における自分の思考過程をたどりながら、文章をどのように読み解釈したのかを問い直し、理解し直したり表現し直したりする場面を設定することが大切である。
- ◆ 学習過程を通して、子どもたちは自分の考えを深めていく。その深まりは、単元に設定された言語活動に反映されていく。そのために、学習のまとめとして、これまでの学習を通して形成された自分の考えを、単元に設定された言語活動の中で表現できるようにすることが考えられる。それが単元のゴールであり、単元を構想する際には、重点化する指導事項を明確にした上で、ゴールにつなげるためにどのように単元展開していくかを考えることが必要となる。